

# パインと移民



沖縄・石垣島のパインナップルをめぐる  
「植民地化」と「土着化」のモノグラフ

HIROMOTO YUKA  
廣本由香

## はじめに

パイナップルとはいったい何なのか――。

灼熱の太陽の下でずらりと列をつくり、ずっしりと根を下ろす。台風や干ばつといった自然の猛威に晒されても、じっと耐え抜いている。エキゾチックな表情を見せることもあれば、土着的な雰囲気も放つこともある。その姿は奇妙な形をしていて、螺旋状の柄の表皮からは甘酸っぱい香りを漂わせてこちらを魅了する。よくよく見ると、王冠をのせて何かを主張するように構えるものもあれば、何かに身をまかせるように傾かたげているものもある。こうした多彩な表情や調子を見せてくれるパイナップルが本書の題材である。

本書の舞台となるのが、沖縄県の南西端に位置する八重山諸島（以下、八重山）である。その中でも政治・経済・交通の要所である石垣島いしがきにスポットライトを当てる。八重山は四方を海で囲まれた海洋周辺地域であり、人とモノの移動が活発な国境に隣接した境界地域でもあるため、首里しゅりや那覇なはを中心とする沖縄本島とはまた違った独自の歴史や文化が形成されてきた。その独自性を生み出している要素の一つが、石垣島から約二八〇キロメートルの距離にある台湾の存在である。

台湾は一八九五年から一九四五年までの五〇年間、日本統治下にあり、この時期にパイ

ン産業が開化した。日本統治時代の台湾では、台湾総督府の統計資料で「パイナップル」という略称が用いられたり、一九三五年に設立された台湾合同鳳梨株式会社を「合同鳳梨」と読ませたり、「パイナップル」という呼び名が通っていた（渡辺1936）。この合同鳳梨は台湾総督府の主導によって七五のパイナップル工場が一つに統廃合されたものであり、この統廃合によって放り出された台湾人事業者が新天地を求めて石垣島中部に入植し、パイナップル生産を開始した。これが石垣島でのパイナップル産業のはじまりである（林1987）。つまり、日本統治下にあった台湾のパイナップル産業と石垣島で立ち上げられたパイナップル産業は、歴史上、地続きに存在していたということである。

その後、日本が太平洋戦争に突入し、戦況が悪化するにつれて、石垣島でのパイナップル生産は中断させられるが、日本の敗戦後に米国施政権下に置かれた石垣島で、いち早く種苗増殖と生産に取り組み、パイナップル製造の礎を築いたのも台湾人であった。また、こうした台湾人とともにパイナップルのための原料農作物の生産に励んだのが、沖縄各地から石垣島に移り住んだ農業開拓移民であったことも見過ごしてはならない。移民が入植した開拓地の厳しい自然条件に耐えられる作物がパイナップルであり、得難い換金作物ないし商品作物だったからである。こうした戦後の食糧難と引き揚げによる人口増加と土地不足、琉球政府（一九五二年四月成立）の八重山開拓移民政策、そして米軍基地建設による強制的な土地接収などの種々の事情から、親しみ慣れた故郷の土地を離れて石垣島へと渡った移民は、決して「肥沃な土地」とはいえない開拓地でパイナップル生産に取り組み始めたのである。

おおよそ南北両回帰線の間には原産する熱帯果樹のパイナップルは、比較的、台風や干ばつに強く、水はけが悪い山地でも栽培できることから、戦後復興に迫られる沖縄において重要作物とされ、生産が奨励された。パイナップル産業は日本政府によってパイナップル関税優遇措置がとられ、琉球政府のパイナップル産業育成政策とともに本土資本の工場進出が助長されたことで、一九六〇年には石垣島でパイナップル工場が八つに増え、基幹産業と呼ばれるまでに急成長した。こうした一九五〇年代後半から一九六〇年代までのパイナップル産業の拡大と好景気を「パイナップルブーム」と呼んだ。ところが、一九七〇年代の冷凍パイナップルの貿易自由化、台風・干ばつの自然災害と生産環境の悪化による離農、沖縄施政権返還後の円高不況やオイルショックなどの影響を受け、パイナップル産業は斜陽産業へと転落していった。一九八〇年代には次々と缶詰工場が閉鎖され、原料買取価格も低迷し、生産者の生産意欲が減退していくなかで、一九九〇年代にはパイナップル缶詰の貿易自由化と外国産缶詰の輸入量増加もあり、石垣島で操業していた最後の缶詰工場が閉鎖された。これにより一時隆盛を誇ったパイナップル産業は終焉を迎えることになった。これを境に、生産者は缶詰工場での加工処理を前提としない生果の生産に切り替えざるをえなくなったのである。

パイナップル産業へのパターンナリストティックな保護政策とモノカルチャー農業の構造的特質は、沖縄の被支配的な歴史的過程と社会経済構造とともに多方面から検証されなければならぬ。間違った方向に進んでいるのは、パイナップル産業が圧倒的に条件不利である離島地域に多数の雇用を生み出し、地域経済を支えていたことから、糖業と並んで沖縄の社会経済を測る一つ

の尺度として役目を果たしていたというのである。

本書の題材であるパインは、他の熱帯果樹にはない、時代状況や社会のありようを映し出す鏡のような性格を有し、舞台となる石垣島にも、辺境地の離島であるゆえの特有の歴史と文化、そして移民によって培われてきた社会のダイナミズムがある。その意味で、両者には圧倒的な固有性<sup>アソシエイト</sup>があり、それが多くの人びとの心を惹きつけてきた理由でもある。

ただし、どんなに強烈な固有性を有していたとしても（逆に固有性が希薄であったとしても）、社会の認識枠組みや社会の価値観次第で、それは「弱み」にもなり、「強み」にもなりうる。言うなれば、モノも人も、そして地域も、相互行為によって新たな認識枠組みや価値を創造することができれば、消極的・否定的に捉えられてきた性質や事柄を自らの固有性として發揮することができる。本書の内容に沿っていえば、どのように辺境地や条件不利地域とされる石垣島を位置づけることができるか、また、どのように酸性土壌作物であるパインの持ち味を生かすことができるかによって、それらの固有性の行方は社会の中で大きく変わってくるというのである。

先回りして結論めいたことをいってしまうと、石垣島のパインは天然に自生していたわけでも、伝統的に栽培されてきたわけでもなく、広範な地域の中で、世代を越えて多くの人に関わった生産活動や、それに伴う試行錯誤や価値転換から手練り寄せられた成果であり、そうしたプロセスの中で固有性が築き上げられてきた。それによって現在、パインは石垣島の地域農業を支えるだけでなく、地域資源として多方面で活用され、「南ぬ島<sup>なぬま</sup>」の

シンボルとして観光の面でも幅広く利用されるようになっていく。

このように石垣島にとってパインは重要な地域資源であるが、当然、一つひとつのパインを手にとってみれば、単なる生産物や商品にすぎない。むしろ、パイン自体が時代や社会について流暢に語ってくれることはないが、こちら側からパインに近づき、その生態や生産のプロセスを調べれば調べるほど、石垣島の環境や歴史が鮮明になり、社会史の輪郭が浮かび上がってくる。それだけでなく、石垣島を越えて広がる沖縄、日本、台湾との複雑な関係が現れ、戦前の帝国主義的な植民地支配や戦後の地域開発、グローバル化をめぐる市場経済や貿易自由化の社会的課題も露わになる。こうした世界市場と資本制、帝国と国民国家といった近代的装置がもたらす力に翻弄されながらも、石垣島の移民は近代を表象するようなパイン生産によって、この地で生き抜いてきたのである。そこに激動の時代や社会を越えて辺境地の条件不利地域に根付いたパインのおもしろさがある。現在の石垣島は観光地のイメージが一人歩きし、その重層的な姿は見えにくくなっているが、地域研究の対象として豊かな条件を兼ね備えているといえる。

本書は、沖縄が一方的に押しつけられた基地被害や公害・環境汚染といった「沖縄問題」を真正面から取り上げるものではない。沖縄と日本本土との不平等な関係と沖縄の自律を阻んできた援助依存型経済の諸問題を視野に入れながら、沖縄社会が置かれた現状に対して迂遠に問題提起しようとするものである。このような戦前の帝国主義的なコロニアリズムから戦後のポスト・コロニアリズムへと至る多層的な「植民地化 (colonization)」の

問題は、沖縄を越えて一人ひとりが向き合い考え続けなければならない社会の多様性やダイナミズムに通じる議論でもあるからだ。

本書では、パインと移民の「植民地化」を出発点に、社会的排除や尊厳の毀損を受けてきた移民一世と二世がパイン生産を通して固有性を形成し、地域との関係を築いてきたことについて考える。そこから見えてくるのは、社会の中で「周辺化」「他者化」された移民<sup>マイノリティ</sup>少数者が現状への批判から未来を切り拓き、遅しく生き抜こうとする実践である。それは同時に、地域社会の中で居場所を築き、社会的存在として自己を公共空間に位置づけることでもある。

G・H・ミードが「自我であるためには、人は共同体の成員であらねばならない」(Mead 1934=1995: 201) といったように、本書で論及するのは環境社会学が研究対象にしてきた人間と自然、自然と地域、地域と人間の不可分な関係であり、不可分であるがゆえに、それなしでは生きていけない人間社会ないし地域社会の「根っこ」の部分である。

その「根っこ」を掘り下げるためにも、本書では一般的な呼称であるパインアップルやパイナップルではなく、沖縄・石垣島の人びとが親しみを込めて呼ぶように「パイン」と表記したい。

## 目次

はじめに | 003

## 第1章 「植民地化」と「土着化」 ..... 013

——なぜパインは原料から地域資源へと転換したのか

- 1 パイン・プランテーションと労働力としての移民 ..... 014
  - 2 貿易自由化と多国籍アグリビジネスによって大衆化したパイン ..... 024
  - 3 多層的な「植民地化」に逆らう「土着化」 ..... 034
- パイン栽培の歴史 ..... 039

資料I

## 第2章 モノと人の関係と生活環境史 ..... 049

——トータルな生活世界を見つめる

- 1 地域固有の資源と土着的知識 ..... 050
- 2 生産労働への社会的承認と尊厳 ..... 068
- 3 トータルな生活世界のモノグラフ ..... 076

資料II

——石垣島の農業 ..... 088

088

### 第3章

## 「中心」と「周辺」の入れ子構造

——なぜパイン生産地は条件不利地域なのか

091

- 1 人とモノが行き交う境界と海洋周辺地域……………092
- 2 石垣島の伝統集落と開拓集落……………100
- 3 移民開拓地の名蔵と嵩田……………105
- 4 日本の辺境地と開拓移民の歴史……………123

#### 資料III

名蔵・嵩田の多文化空間……………126

### 第4章

## パイン産業と台湾系移民

——パイン生産の草創から再生、興隆まで

133

- 1 台湾移民研究と越境・境界研究……………135
- 2 台湾人事業者の入植とパイン産業の草創……………139
- 3 台湾系移民による開拓集落の形成と法的地位の変化……………157
- 4 台湾人によるパイン生産の再開とパイン産業の興隆……………166
- 5 「辺境地」から「起点」「中心地」へと変化させたパイン生産……………178

#### 資料IV

パイン産業と季節労働者……………182

### 第5章

## パイン産業の斜陽化

——モノカルチャー農業の「匿名性」

187

- 1 沖縄の農業構造と「後進性」……………189
- 2 未熟果パインと沖縄産パイン缶詰の悪評……………201
- 3 斜陽産業となったパイン産業と専業農家の生き延びる選択……………203
- 4 果実肥大処理をめぐる不良品と花樟病発生……………223
- 5 原料農作物の品質低下と反収・収量への社会的価値評価……………227

#### 資料V

パイン公害と赤土流出……………231

### 第6章

## パイン産業の終焉と生産者の価値転換

——「おいしさ」と「固有性」の創出

235

- 1 加工用原料から生果へのターニングポイント……………237
- 2 生産の価値転換と「おいしさ」に向けた実践……………250
- 3 生産地域と風土への再評価……………259
- 4 生産者の自己決定と固有性の創出……………265
- 5 「おいしさ」の社会的価値評価と生産労働の「喜び」……………286

#### 資料VI

パインの日と認証マーク……………289



# 「植民地化」と 「土着化」

なぜパインは  
原料から地域資源へと  
転換したのか

終章

## パインと移民の社会的承認

——「土着化」への転換過程における「承認をめぐる闘争」

291

1 パイン生産をめぐる三つの転換

292

2 「土着化」のプロセスと地域社会の「根っこ」

297

註 | 301

あとがき | 330

参考文献 | i

ブックデザイン  
北田雄一郎